５．日本人一般集団における心電図での左室肥大所見および腎機能障害と循環器疾患死亡との関連：NIPPON DATA 90

研究協力者　多田　美帆（慶應義塾大学医学部衛生学公衆衛生学教室　大学院生）
研究協力者　桑原　和代（慶應義塾大学医学部衛生学公衆衛生学教室　助教）
研究分担者　門田　文　（滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門　准教授）
研究協力者　近藤　慶子（滋賀医科大学 NCD 疫学研究センター予防医学部門　講師（学内））
研究協力者　久松　隆史（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科公衆衛生学分野　准教授）
研究分担者　岡山　明　（合同会社生活習慣病予防研究センター　代表）
研究代表者　三浦　克之（滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門　教授）
顧　問　　上島　弘嗣（滋賀医科大学 NCD 疫学研究センター　特任教授）
研究分担者　岡村　智教（慶應義塾大学医学部衛生学公衆衛生学教室　教授）

【目的】

フラミンガム研究において左室質量と心血管イベントとの関連が報告されている。また、慢性腎臓病（CKD）は冠危険因子として注目されており、日本人においては従来の冠動脈疾患発症のリスクスコア（吹田スコア）に CKD を含むとより正確な予測が可能となる事が報告されている。本研究では日本人一般集団の長期追跡調査である NIPPON DATA 90 において、心電図で評価した左室肥大および腎機能障害と脳・心血管疾患（CVD）死亡との関連を検討する。

【方法】

1990 年に実施された循環器疾患基礎調査の追跡研究である NIPPPON DATA90 の参加者 8383 人のうち、CVD 既往のない 7362 人を対象とした。対象者を心電図の左室肥大所見（ミネソタコード 3-1 および 3-3）と腎機能障害（eGFR＜60 mL/min/1.73m2 もしくは尿蛋白陽性）の有無で 4 群に分類した。従来の冠危険因子（年齢、性別、BMI、喫煙歴、飲酒歴、脂質異常症、糖尿病、高血圧）を共変量とし、Cox 比例ハザードモデルを用いて各群の CVD 死亡ハザード比（HR）を算出した。

【結果】

対象者の平均年齢は 52 歳、左室肥大なし／腎機能障害なし群（グループ 1）は 6223 人、左室肥大あり／腎機能障害なし群（同 2）は 361 人、左室肥大なし／腎機能障害あり群は 705 人（同 3）、左室肥大あり／腎機能障害あり群（同 4）は 73 人であった。平均追跡間は 17.6 年、追跡中に 465 人が心血管疾患で死亡した。グループ 1 を参照群として、グループ 4 では有意に CVD 死亡ハザード比が高かった（HR 2.30: 95% CI 1.42-3.74: P=0.001）。同様にグループ 2 および 3 では有意差が出なかったものの、CVD 死亡ハザード比は上昇した。（グループ 2; HR 1.23: 95% CI 0.91-1.65: P=0.177）（同 3; HR 1.22: 95% CI 0.93-1.62: P=0.155）

【考察】
左室肥大および腎機能障害の両指標は従来の冠危険因子と比較して、より動脈硬化の進んだ状態を示している可能性があり、重要な危険因子になり得ると考えられた。

第 59 回日本循環器予防学会学術集会（2023.7.6～8 鹿児島市）